

3 度目のニューノーマル に向けて

Toward 3rd New Normal

会長 笹瀬 巖



「ニューノーマル」とは、社会的に大きな影響を与える出来事により、社会変化が生じて、これまでの「当たり前」が通用しなくなり、新しい常識や常態が生まれることです。これまでも、2000年初頭のインターネットの本格的な普及、及び2009年以降のリーマンショックを起因とした世界金融危機によって生じており、今回のCOVID-19コロナ禍で3度目となります。1度目のニューノーマルでは、ベンチャーIT企業の急成長により、旧態依然の営業・広告・販売方法が通用しなくなり、2度目のニューノーマルでは、世界経済が減速した状態が続き、国連のSDGs（持続的発展可能な目標）やCSR（企業の社会的責任）等、企業の取組みや責務が追求されるようになりました。このように、これまでのニューノーマルでは、社会とビジネスモデルが大きく変わり、企業は変革を余儀なくされました。

今回のコロナ禍に起因するニューノーマルに向けて、ICT（情報通信技術）の研究開発に携わっている私たちには、プロフェッショナルとして、テレワーク、オンライン教育・医療など、様々な分野の課題解決に向けて、「情報通信技術の浸透が、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる」ためにDX（デジタルトランスフォーメーション）を一層推進することが求められています。本会も、本年6月に、「コロナ後の新たな電子情報通信技術の発展に向けて」と題して、①働き方改革の促進、②レジリエントで安全な社会の構築、③新たなICT活用の促進、④新たな教育システムへの貢献、⑤全ての人々にICTを、の5項目の会長声明を出し、総力を挙げて、コロナ後の生活が安全で実りのあるものになるように、ICTの立場から技術開発を進めています。しかしながら、コロナ禍においては、ビジネスや経済だけでなく、慣れ親しんだ生活様式・習慣まで変えざるを得なくなっています。また、自粛生活や行動制限の長期化による疲れやストレスに起因した、ICTの利活用だけでは解決できそうにもない、ライフスタイルの新たな課題も生じています。

感染症のパンデミックは、これまで何度も歴史を変えるほどの影響を及ぼしてきました。例えば、14世紀には、「黒死病」と呼ばれるペストの大流行により、当時のヨーロッパの人口の3割に相当する2,500万人以上が死亡しました。ペストの社会的影響は深刻で、多くの人が人間不信になり、法も秩序も崩壊しました。また、教会の教えにも疑問を抱くようになり、文明自体も壊滅寸前にまで追いやられました。歴史から教訓を学ばず、コロナ禍が生じることを全く予測できなかったことを、私はとても残念に思っています。

幸いなことに、我が国は、現時点では、ビジネスや経済活動は何とか維持され、法や秩序も保たれていますが、コロナ禍の終息には、まだかなりの時間がかかると思われます。ICTのお陰で、「いつでも、どこでも、誰とでも」つながることは実現されてはいますが、「今だけ、こだけ、あなただけ」という、五感や雰囲気まで伝わる現実空間の再現には至っていません。

私は、コロナ後のニューノーマルに向けて、「情けに報いて、信（よしみ）を通わす」真の「情報通信」を実現するには、技術開発だけでは不十分だと思います。歴史・文学・音楽・美術など、人類が築き上げた文化・文明を学ぶとともに、自然科学への造詣を深め、広い視野と深い教養に基づいて、物事を判断できるよう、自己研鑽し、人間力を高めることが必要であると思います。